



『卵子老化の真実』

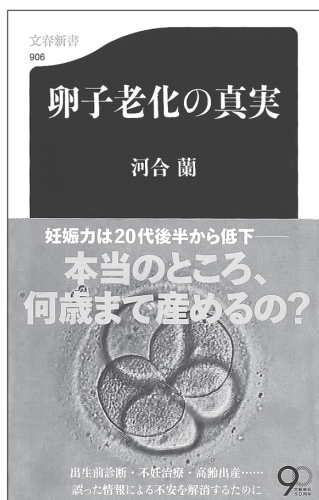
評者・大坪 三保子 たらちね助産院

タイトルに愕然として、帯の写真に生命の神秘を感じるところから始まる。2025年問題といわれる人口の高齢化と少子化、そして格差社会にどのように対応するか、待ったなしの状況で、私たちは生活をどのように支え暮らしていくか選択を迫られている。そのような状況のなかで「子どもを産むこと、育てること」が個人の選択の問題では済まされない危機感が生まれているようだ。

この本の全4章、「何歳まで産めるのか」「妊娠を待つ」「高齢出産」「高齢母の育児」から、今まさに子どもを産む世代に何が起きているのか、生殖医療の現状が理解できる。そして何より経験者からの聞き取りのメッセージからは、発展した科学技術と人間らしい幸福を求めることの融合の力も、女性やこれから生まれる子どもたちが秘めていることが伝わってきて感動する。

高齢出産して、妊娠中に出生前診断を受けなかった母親の「私は障がいについて大した覚悟があったわけではないのですが、ただ妊娠できたことがうれしかったから、あまり心配しないで産みたかっただけです」という正直なコメントが記されている。「仮の妊娠」の時期をなくすため、わたしたち保健医療従事者を含め社会全体が著者からのメッセージでもある“胎教とは何か”を考え、真に妊娠を受け入れ、喜びを

時代のニーズ—生殖医療と高齢出産への理解と女性にやさしい支援



河合 蘭 著
定価 893 円(本体 850 円+税 5%)
新書版/文藝春秋/2013 年

感じる時間を育むことが、社会の明るさに影響すると信じて、積極的に働きかけていかなければならないと思った。

人間の身体の仕組みは、どのような環境でも子どもを産み育てる方向に働こうとするけれども、社会の仕組みは妊娠にやさしい状況ではない方向に進んで行っているようだ。妊娠出産は女性が自ら選択するのではなく、時代がお産を選んでいるのではないかと考えさせられた。

わたしも 32 歳から 3 人の子どものに恵まれ、末の子は 42 歳のときに助産院で穏やかなお産を経験し、その後を過ごした。幸運だったのかもしれないが、わが子との一体感の時間のなか

で生きている充実感がムクムクわいてきた感覚が忘れられない。この本のなかでは高齢出産のメリットについても紹介されているが、「卵子の老化に気づいた女性はいきものとしてのまっとうな感覚に目覚める」という発想が、他の生との共存を目指す人間性の充実につながるのではないだろうか。母子保健を担ううえで生殖医療の現状を正しく理解し、支援することは、時代を受け入れ生き抜く力が母親に育まれることであるという熱いメッセージを受け取ったように感じた。ぜひ母子支援活動に携わる方々に読んでいただきたいと願っている。